【海外留学レポート】

本当の国際交流

-ベトナムフィールドスタディを通して学んだこと-

The True International Exchange: What We Learned through the Vietnam Field Study

三重大学教育学部　**内田　陽菜、坂本　京子、佐藤　有紗**

三重大学人文学部　**佐々木　歩、隅　まりや**

UCHIDA Haruna, SAKAMOTO Kyoko, SATO Arisa

SASAKI Ayumi, SUMI Mariya

(School of Education and Humanity, Mie University)

キーワード：ベトナム、異文化交流

はじめに

私たちは２０１８年２月２８日から３月８日までの９日間、ベトナムフィールドスタディに参加しました。ベトナムフィールドスタディは、ベトナムへ行き、現地の学生と交流しながら、それぞれの学生が興味をもったテーマについて調査をしたり、現地の文化に触れて異文化交流を行ったりするという海外研修プログラムです。半年ほど前から大学全体で参加者の募集があり、人文学部の学生４名と、教育学部の学生４名の、合わせて８名が参加しました。参加者決定後から出発前に、5 回の事前学習が行われました。簡単なベトナム語や、歴史や通貨などについての学習をしたり、お互いに調べてきたことをプレゼンテーションしあったりすることを通して、９日間ベトナムで生活をするにあたっての基本的なことを知ることができました。また、事前学習を行ったことで、現地での調査をより円滑に進めることができ、現地での知識をある程度つけることができたので、より多くの異文化体験や観光を楽しむことができたと感じています。また何より、一緒に行く参加者同士の交流を持てたことが、楽しく円滑にベトナムでの９日間を過ごすことにつながりました。

現地での研究活動

ベトナムフィールドスタディということで、現地では主に調査活動を行いました。事前に日本で学

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

生自身が興味をもったことに基づいて課題を決定し、①ベトナムの言語史、②ベトナムの教育文化、の大きく２つのグループに分かれて調査を行いました。言語史は主に人文学部の学生、教育文化はおもに教育学部に属する学生が中心となり、出発前にはホーチミン市師範大学の教諭と連絡を取り、現地での調査では、ホーチミン市師範大学の日本語学部のベトナム人学生５～６名を含めたそれぞれ１０名ほどのグループで活動を進めました。

ベトナムの言語史グループでは、はじめに、中心となるテーマを「なぜベトナムから漢字が消えたのか」と設定しました。かつて、ベトナムは日本と同じく中国の影響を受けた漢字文化圏であり、漢字を多く使用していましたが、時を経るにつれて、日本では漢字を簡略化して表す「ひらがな」「カタカナ」というものを独自に発明しました。現代の日本では、漢字、ひらがな、カタカナをうまく組み合わせて、日本語を表記しています。これに対して、ベトナムでは、漢字を難しくした「チュノム」というものを発明しました。「日本では、漢字を簡略化したのに対し、ベトナムでは、なぜ難しくしたのか」と疑問が出てきたことから、上記のテーマ設定をしました。大きな要因は、「中国への感情の違い」であることが推測されました。中国から漢字が入ってきて、元々あった音に漢字を当てはめていきましたが、音の数量の関係で当てはめきることができず、独自の文字を発明しました。その後、ベトナムはフランスの支配下に置かれます。元々あった中国から独立したいという思いとフランスの支配下に置かれたことが原因で、ベトナムから漢字が消えたと言われています。日本は中国から漢字が入ってきたことにより、もっと中国から色々なことを学びたいと思い、多くの日本人が中国へ渡り、中国文化を日本に取り入れました。このように、中国に対する気持ちの差が、現代のベトナムと日本の言語に違いを生んだのだと結論付けました。

ベトナムの教育文化グループでは、「ベトナムと日本の教育の比較」に焦点を当て、現地の中学校を訪問し調査をしました。そこで出てきたベトナムと日本の教育の違いは、まず、ベトナムでは英語教育がとても充実しているという点でした。中学校の数学の授業を英語で行ったりするなど、英語を英語の授業以外で使用しており、日本で行われている英語教育よりも実用性の高い英語教育がなされていました。これにより、子どもたちの興味関心は引き立てられ、その後の勉強意欲向上につながると思いました。また、中学校訪問の際に、現地の生徒たちが私たち日本人学生の訪問をとても歓迎してくれました。教室に入った際に大きな拍手をしてくれたり、廊下ですれ違った際には大きな声であいさつをしてくれたり、私たちに対して積極的に質問をしてくれたりしました。この姿に私たちは非常に感銘を受けました。日本であれば、もし言語の通じない外国人の学生が学校に訪問したとすれば、何を話せばいいのかわからず困惑してしまったり、消極的な態度をとったり黙り込んでしまうと思います。しかし、ベトナムの生徒たちは私たちを歓迎し、進んで交流をしてくれました。日本の生徒には、このような積極性と、異文化を受け入れる姿勢があまりないのではないかと感じました。これは日本がベトナムの教育から学ばないといけないことであると強く感じました。このような体験を通し

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

て、日本の教育においてもう少し「子どもたちが積極的に取り組み、苦手意識をもたないような教育を行うこと」が大切であるという考えを持つことができました。

上記のような調査活動は普通に海外へ行くだけでは経験できないことだと思います。また、現地での移動は大学がマイクロバスを用意してくださったり、活動を進めていくにあたってベトナムの学生がサポートしてくださったりしたので、スムーズかつ安全に進めることができました。特に言語の通じない私たちに寄り添い、積極的に助けてくれたベトナム人学生には感謝の気持ちでいっぱいです。ベトナム語の文献をわかりやすく日本語に訳してくれたり、私たちの難しい質問にも根気よく考えて答えてくれたり、私たちのわがままにたくさん付き合ってくれました。日本人とベトナム人で、それぞれにできることとできないことがありますが、自分はわからない・できないからやらないのではなく、それぞれができることを持ち寄って協力することができました。両学生が国境を越えて協力して得ることができた結果にこそ価値があり、ベトナム人学生の力がなければわたしたちはこのフィールド調査を達成することができなかったと思います。このようなホーチミン市師範大学と三重大学の学生がつながって活動を行えたのは両大学のサポートあってのことです。これらのサポートのおかげで、９日間の中で、現地での授業参加や観光、ホームステイなどの異文化交流などもしながら、ここまで本質的な調査活動をすることができました。

ホーチミン市師範大学での授業

ベトナムフィールドスタディの９日間の研修の中で、ホーチミン市師範大学で私たちのために特別に授業を設けていただきました。研修の初めのほうでは、日本語学部の４年生の学生が教壇に立ってベトナム語の授業をしてくれました。また、私たち日本人１人１人にベトナム人学生がついて発音指導をしてくれました。１年生の学生も多く、日本語を学び始めて１年にも満たないとは思えないほど、みな流ちょうな日本語を話しており大変驚きました。日本語で表現するのが難しい説明ではときどき英語をまじえたりしながら、私たちにベトナム語を教えてくれました。ベトナム語を学ぶ上で一番難しいと感じたのは、発音でした。日本語には無いような、「ん」の喉の奥から出すような発音が特に難しかったです。発音が難しいため、意味を理解する余裕までなく、音を覚えるだけで精一杯でした。基本的な挨拶も教わりましたが、「ありがとう」や「こんにちは」は比較的簡単で、その後の生活中も使うことができ

写真 1　ベトナム語を教えてくれた日本語学部の学生さんと

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ました。数字の言い方も日本とは違って、4 桁目でピリオドを打ち、そのピリオドにも位置によって異なる呼び方がついていました。しかし、例えば 11 のことを「じゅう」＋「いち」のように組み合わせて発音するという点は日本語と似ていると感じました。

さらに、ベトナムの文化の授業を受けました。この授業のテーマは、「日本文化とベトナム文化の比較」でした。まず、ベトナム人が抱く日本のイメージに、「敗戦し貧しかったが、先進国になった」というものがあるといいます。そしてベトナム人は、まだベトナムのことを途上国だと思っているそうです。しかしベトナム人と日本人は、親属国（昔の中国と朝貢関係にあった国）だということ、頭が良く勤勉で勇気があること、という点で共通しています。こうした共通点があるため、ベトナムは必ず日本のような先進国になれると人々は信じており、日本に学びたいと考えているといいます。私たちはそれを聞いて、日本語学科の学生たちがあれほど熱心に日本語を学んでいる背景をよく理解することができました。

ベトナム語は､日本と同じようにもともと漢字文化圏であったベトナムの下で築き上げられたため、似ているところもきっと多いだろうと思っていました。しかし、そうした文化面での共通点を深く掘り下げてみると、その中国文化に対する意識の違いなど、大きな相違点がみつかるというのが非常に興味深く感じられました。これからも、ベトナムと日本の共通点や相違点を見つけ、ベトナムの文化をよりよく理解し、身近なものに感じられるよう努力したいと思います。

現地でのホームステイ

このプログラムの中盤では、１泊のホームステイを体験しました。私は日本語学部１年のホンさんという女子学生のもとで１日をすごしました。ホンさんは日本語を 3 か月しか勉強していないのにもかかわらず、私はほとんど不自由することなく彼女とコミュニケーションをとることができたので、自分は何年も勉強している英語がどうして上達しないのかと悲しくなるほどでした。ホームステイの間、言葉の通じない私が不自由のないように力を尽くしてくれました。ホンさんの家族の方も、言葉も通じない私にまるで自分の娘のように優しくしてくれました。一緒に市場に買い物に行き、その材料で一緒に春巻きを作って食べました。市場では野菜がゴロゴロとそのまま置かれていて、これが欲しいと指をさすと、その場でお店の方がナイフで皮をむいて使いやすい大きさに切って渡して

写真 2ホームステイ先でホストファミリーとつくった春巻き

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

くれました。お肉も同じように、切り株の上でナイフを使ってたたいて分けて渡してくれました。普段私はスーパーで食品を買っていたので、正直なところこの市場での光景は衝撃的でした。私はこのホームステイの体験を通して、ベトナムは「今を生きている」国であると強く感じました。食べ物を買うときは、市場で野菜やお肉がそのままゴロゴロと売られているものの中から、必要な分だけお店の人に切り分けてもらいました。また、食器を洗う時も外でためた雨水をつかっていました。日本では設備が整いすぎて気が付きませんが、生きていくうえで必要なことはシンプルなことではないかと思います。働いてお金を稼いで、それを使って物を買ったりごはんを食べたりして生きていく。日本にいると、便利なものが多すぎて、視野が狭くなってしまうと思います。ベトナムは発展途上なところがあるからこそ、みんなが生き生きと生活していて楽しそうでした。日本人からすると、そんなことでと思うことにも幸せを感じ、笑顔になっていました。そういった姿をみて、恵まれているからといって幸せなわけではないのだと強く感じました。最後にホンさん家族とのお別れの際に、私は日本語で、言葉の通じない私を受け入れてくれてよくしてもらったこと、ベトナムという国がさらに好きになったこと、貴重な体験をすることができたことなど、感謝の気持ちを伝えました。言葉がわからないのに、ホンさんのお母さんは笑顔で大きく頷いてくれました。言葉は通じあわなくても気持ちは通じあうのだと感じたと同時に、ホームステイの間にこんなに良くしていただいたのにもかかわらず、日本語しか話せず感謝の言葉すらも伝えることのできない自分に情けなさとふがいなさを感じました。その国の言語を学ぶことの大切さも同時に感じました。

ベトナム観光

私たちは滞在中にベトナムのさまざまな場所に観光に行きました。ここでも、ベトナム人の学生が同行してくれて、案内や買い物の手助けをしてくれました。大学でのプログラムとして、サイゴン大教会、サイゴン中央郵便局、歴史博物館、ベンタイン市場、ドンコイ通り、統一会堂、水上人形劇、クチトンネル（Địa đạo Củ Chi）、歴史遺跡ホーチミン戦争証跡博物館に行かせていただきました。また、自由時間にベトナムの伝統衣装であるアオザイ(Ao dai)をレンタルして着て、タンディン教会(Tan Dinh Church)とスリ・タンディ・ユッタ・パニ（Sri Then Da Yutha Pani Temple）に行ったり、ほぼ毎日ドンコイ通りで買い物をしたりしました。

写真 3　統一会堂の前でジャンプ！

観光した場所では、主にベトナム文化を学んだ場所と平和について学んだ場所がありました。始めに文化について述べます。サイゴン大教会では、赤レ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ンガ造りのネオゴシック様式の、荘厳な雰囲気の外観を見ました。歴史博物館は、ベトナムの古代の歴史に関係する資料を展示しているところで、授業で学んだことを確かめられる時間であり、ためになる時間でした。ベンタイン市場の中は、お店がびっしりと立ち並び、通路も狭く人も多いため混雑していました。事前に観光客を狙ったスリが多いと聞いていたため、おびえていましたが、ベトナム人学生がずっと一緒にいてくれ、安心して回ることができました。フルーツの量り売りやベトナムの民芸品などのお店が多くあり、また、生き生きとした市場の雰囲気を味わうことが出来、ベトナムらしさ、力強さを感じることもできました。水上人形劇は、ベトナムの農村の文化に触れる機会になりました。このように、古代から現代までのベトナム文化について感じることができ、非常に勉強になりました。1 回の訪問でこんなに幅広く文化を学ぶことができたのは貴重な経験だと思います。

次に平和について述べます。統一会堂はベトナム戦争終結となった場です。地上階では、豪華な大統領家族の暮らしが窺えました。しかし地下に行くとその様子は一変し、戦争時の作戦指令室など戦争のためのつくりがありました。この一つの建物に大統領家族の住まいとしての役目とともにベトナム戦争に関する様々な工夫が凝らされている面を知ることができました。平和と戦争の両方を一気に感じることができたとともに、なんとも言えない、不安を感じました。クチトンネルという歴史遺跡ではトンネルの中に入ることもでき、トンネルの中を実際に通ってみることや武器をみて、当時の兵士たちの生活や戦争の様子がうかがえ、胸が締め付けられる思いでした。さらにここでは実弾射撃も行いました。トリガーを引けば当然ながらモデルガンや縁日の射的には無い衝撃を受け、重量だけではない「重み」を感じました。また、それが誇らしげに展示・案内されていることに少し違和感を覚えました。そんな思いの中で私たちはホーチミン戦争証跡博物館を訪れました。戦争が勃発するまでの経緯や被害者の写真、反政府運動者への拷問や処刑の様子まで、ベトナム戦争に関する展示が多岐にわたってなされていました。ここで私たちは戦争とは惨いものであり、多くはかけがえのない命を奪っていくということ、改めて戦争の無意味さを認識しました。また、ベトナム人学生にベトナム戦争のことを聞いても知らないことが多いことや戦争博物館にはベトナム人はほとんど行かない、外国人の付き添いだけでしか行かない、と言っていることに非常に驚きました。国民のほとんどが戦争を経験しているだけに、戦争を話題にすることもまだ厳しいところがあるのか、しかし若い世代が戦争のことを知らないのは問題であるとも感じました。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

観光のために設けられた時間以外にも、毎日ドンコイ通りへ出かけて、おいしいものを食べにいったり、気になったところに行ってみたり、買い物をしたりしました。ベトナムのタクシーは非常に安いため、時間さえ許せばどこへでも行くことができました。

写真 4　大学近くのアイスクリーム屋さんへ

ベトナムフィールドスタディ参加者の日本人学生８人は、とても仲が良く、プログラム中の自由時間は全て一緒に過ごしていました。ベトナム人学生も私たちがプログラム内で出かけるときには必ずついてきてくれました。彼らはとても親切で、通訳をしてくれたり、押し売りなどに困っているときには助けてくれたり、師範大学の食堂で食事をするときは食べ物を注文してくれたり、観光地へ行ったときは、店員さんと値段交渉をしてくれたり、私たちがアオザイを着てみたいと言えば、観光客向けのおすすめのレンタルアオザイのお店を紹介してくれました。また、観光の際についてきてくれたベトナム人学生と話をしたり、質問をしたりして、ベトナム人学生のおすすめのお店や場所に行くこともでき、ベトナムの大学生の日常を体験することができました。

写真 5　大学の食堂でバインミーを

おわりに

私たちはこのベトナムフィールドスタディでの９日間を通して、多くの体験をさせていただきました。通常の海外留学では、現地へ行っても、参加者同士で授業を受けたり活動をしたりすることがほとんどで、現地の学生とはあまり交流ができないまま帰国することが多いですが、この研修ではベトナム人学生に支えてもらいながら、たくさんの交流をすることができました。私たちは、現地の学生との交流を通して、国際交流とは国と国との交流ではなく、人と人との交流なのだと感じました。そして、外国語を習得するには、何よりもその言語を積極的に使おうとする態度なのだということも強く実感し、とても刺激を受けました。引率の先生方も私たちの活動がより有意義なものとなるように尽力してくださり、海外と

写真 6　閉会式での記念撮影

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

いう日本よりも様々なリスクが高い場所で、時には非日常な体験をして浮かれていた私たちを安全に引率してくださいました。私たち日本人学生８名全員にとって、この研修が人生で１番というくらい楽しく有意義なものとなったのは、９日間のこの研修中に、ベトナム人学生のみなさん、ホーチミン市師範大学の先生方、引率の先生方に恵まれたからだと思っています。本当にありがとうございました！

＊ 本記事については、本マガジン『留学交流』5 月号にも下記の関連記事が掲載されていますので、ご参照ください。

【論考】
アクティブラーニングと海外留学
-主体的学び、主体性に着目して-
三重大学教養教育院特任講師　奥田　久春
(https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2018/05.html)

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.